
「国語演習」におけるアクティブラーニングの導入

小山田 成治

1 「国語演習」での試み

私の勤務校である成城学園高等学校では、二年生及び三年生の他大学受験を目指すクラスを対象に「国語演習」という科目が設置されている。端的に言えば、大学入試問題に対応できる力を養うことを目的とした授業である。

今年度、私は二年生の「国語演習」の現代文を担当している。担当する教員によって進め方は様々であるが、従来、私は次のように授業を行ってきた。

- ① 次週の授業で扱う練習問題を事前に配付し、それを解いてくることを宿題とする。
- ② 次週の授業で、問題文を読みながら重要な記述に線を付し、文章の構造を解説する。
- ③ 設問一つ一つに解説を加えながら、答え合わせをする。

大雑把ではあるが、以上のようにまとめられる。

しかし、大学入試改革に伴い、生徒の能動的な学習の導入が要請される昨今、従来型の授業ではそれに応えているとは言い難い。そこで、新たな授業展開として今年度の授業で試みている内容を以下に紹介していく。年度半ばのため、中間報告のようなものになってしまうことを予めご了承ください。

2 事前準備

どの授業であっても、いきなり生徒主体の授業を行うのは難しい。そのため、仕込みともいうべき事前準備を行った。大学入試では国公立大学の二次試験以外のほとんどは、マークシートを導入しているので、まずは選択肢問題を中心に扱う。先述の通りの授業を行うのだが、特に解答を導く際の、どうしてこの解答になるのかという根拠の解説を念入りに行った。通常の高校で行う定期試験では、本文に書かれていることに加え、発展した内容を授業で解説することがある。必然、定期試験では、そうした本文にはないが、授業で解説した事柄からも出題する。しかし、入試問題は、受験生のほとんどにとっては初見の文章であり、何の解説もなされていない。従って、正答の根拠となる記述が本文に記されているということになる。その根拠をいかに見つけ出すかということを重点に授業を行うのである。

そして、生徒が正答につながる根拠を見つげ出すコツが身についた頃、次の段階に進む（私が担当しているクラスでは、約一か月の時間を有した）。今度は、生徒を指名し、自分が正答だと考える選択肢を、その根拠と共に発表してもらおう。この狙いは幾つか挙げられる。教師の立場から言えば、教師が一方向的に解説し

ているだけでは、本当に生徒が根拠を見付け、正答にたどり着いているかを確認するのは難しい。それを確認する狙いがここにある。また、生徒側から言えば、何となく答えを導いている生徒や、どう考えてよいか分からない生徒に、他の人はどのようにして解答を導き出しているのかという具体的な例を示し、それを参考にすることでより正答率を上げるという狙いもある。よく言われることだが、教師の解説より、同じ生徒という立場からの解説の方が、言葉の選び方や説明の仕方がしっくりくるようであり、理解がはやい。このような取り組みを一学期間行った。

3 グループ学習

二学期からはグループ学習を試みた。事前に練習問題を配付し、宿題として解いてくるところまでは前述の通りである。が、授業では四人一組のグループになり、それぞれどのように考えてどの選択肢を正答にしたのかを話し合ってもらった。そして、その話し合いの中で決めたグループとしての答えを、更にクラス全体に向けて根拠と共に解説し合うという形式をとった。

最初は遠慮して意見を述べない生徒がいたり、グループの中で一目置かれている生徒の意見を採用したりと、十分な話し合いができないこともあった。そこで、「一問につき、一グループに代表して解答してもらい、それを正答とする」というルールを付加した。つまり、十分に検討しないと、誤答が正答になってしまう可能性がある。そこには責任が伴う。もちろん、誤答を正答にした場合は軌道修正する用意はあるのだが、このルールが加わることにより、次第に改善され、活発な意見交換がなされるようになった。また、代表するグループの答えに納得がいけない場合には、他のグループから異議申し立てがあり、代わりに解説を行い、正答にたどり着くというケースも見受けられるようになった。

こうした授業の効果については、次のようにまとめられる。

- ① 何となく答えを導き出していた生徒が論理的に考えるようになり、正答率が上がる。
- ② 自分とは異なる他者の考え方に触れることで、思考のあり方、着眼点が多様になる。
- ③ 自分の考えをより論理的に主張することができるようになると共に、他者の見解に耳を傾けるようになる。

特に③に関しての意義は大きい。

練習問題を解くという作業は、一人で行うことが多い。そして、生徒はそれぞれに思考や着眼点に独特のパターンを持っていることも多い。そのため、常に同じ見方しかしないので一端ズレてしまうと、なかなか正答にたどり着かなくなってしまう。しかし、グループでの話し合いを経ることで、様々な思考や着眼点があることを理解し、ワンパターンな状態から脱することができるのである。

思考や着眼点の癖のようなもの、それは時に視野の狭さを意味するが、こうしたグループ学習を通して視野の拡大を図り、より正確な読解へと導くのである。

4 記述問題への取り組み

三学期からは記述式問題に取り組んでいる。多くの大学入試問題はマークシート方式であるが、一部の私立大学、及び国公立大学の二次試験では記述式の問題が出題される。生徒の多くは「記述式問題＝難しい」という認識を持っており、敬遠する傾向にある。とは言え、一点の差で合否が決まるのが入試の世界。取り組まないわけにはいかない。現在は、グループに分かれて、記述式の問題において、より良い解答を作り出せるよう取り組んでいる。選択肢の問題とは異なり、グループでの検討により導き出した解答を全グループの代表者が白板に書く。つまり、白板には同じ問題の解答例がいくつか並ぶことになる。それを私が解説を加えながら添削していくのである。従来の講義型の授業では私が模範解答を示し解説するわけだが、生徒は自分の解答と比較することしかしないので、自分の解答がどこまで正答に近いのか判断しにくい。が、生徒の様子を見ていると、解答例を複数並べることで、個人が導き出したものとの比較ができ、更にはどのような内容を盛り込めば正答に至るかといったところまで理解が深まるようである。

5 これからの課題

以上、これまでの取り組みを述べてきたが、常に念頭に置いていなければならない留意点もある。それは、練習問題の難易度である。授業での生徒の様子を見ていると、話し合いの前に、まずは自分が導き出した解答を発表し合うことから始める。その際、全員の解答が一致した場合は検討の余地がないためか、十分な話し合いがなされない。しかし、見解が分かれた問題に関しては、意見を活発に交わし、検討するという姿勢が見られる。つまり、生徒の実力より少し高いレベルの練習問題を用意する必要がある。もちろん、受講する生徒の実力には個人差はある。が、グループ学習を導入することにより、従来型の授業を行うよりその差は小さくなっているという実感はある。従って、取り扱う練習問題のレベルも設定しやすい。

これらの取り組みは、今年度から始めたものである。この原稿を書いている段階ではまだ年度が終わっていないので、途中までの経過報告という形になる。また、これまで述べてきたことは、今年度受講している生徒だからこそ達した状況なのかもしれない。受講する生徒が異なれば、また違う状況が生じる可能性は充分にある。そのため、生徒主体の授業の成果について論じるのは早急なのかもしれない。が、従来の講義型の授業とは明らかに異なる成果が見られる。

こうした生徒主体の授業を通して実力向上を図る試みを、更なる工夫と改善を重ねて取り組んでいきたいと思っている。

(成城学園中学校高等学校 教諭／本学非常勤講師)

